

修士論文（要旨）  
2024年1月

主たる養育者の情動知能と育児ストレスおよび抑うつとの関連

指導 山口 一 教授

国際学研究科  
国際学術専攻  
心理学実践研究学位プログラム 臨床心理分野  
222J2001  
太田 里歩

Master's Thesis (Abstract)  
January 2024

Relationship between Emotional Intelligence, Parenting Stress, and Depression among  
Primary Fosterers

Riho Ota  
222J2001

Master of Arts Program in Clinical Psychology  
Master's Program in International Studies  
International Graduate School of Advanced Studies  
J. F. Oberlin University  
Thesis Supervisor: Hajime Yamaguchi

## 目次

第1章：問題と目的	1
1.1 児童虐待	1
1.2 育児ストレス	1
1.3 児童虐待と育児ストレス	2
1.4 子育てと養育者の抑うつ	2
1.5 情動知能	3
1.6 情動知能とストレス	3
1.7 育児ストレスと情動制御	4
1.8 研究の目的	4
第2章 方法	
2.1 調査対象者	5
2.2 調査の実施方法	5
2.3 倫理的配慮事項	5
2.4 質問紙の構成	6
2.4-1 対象者に関する項目	6
2.4-2 情動知能	6
2.4-3 育児ストレス	7
2.4-3 抑うつ	7
2.5 分析方法	7
2.6 予測される結果	7
第3章 結果	
3.1 基礎データ	8
3.2 尺度の因子構造と信頼性の検討	8
3.2-1 育児ストレス尺度	8
3.2-2 情動知能尺度	11
3.3 兄弟の有無別による各尺度の差	12
3.4 子どもの年齢別による各尺度の値の差	12
3.5 各下位尺度の相関	13
3.6 共分散構造分析	13
第4章 考察	
4.1 尺度の因子構造と信頼性の検討	14
4.1-1 育児ストレス尺度	14
4.1-2 情動知能尺度	15
4.2 兄弟の有無別による各尺度の差	15
4.3 子どもの年齢別による各尺度の値の差	15
4.4 各下位尺度の相関	16
4.5 共分散構造分析	17
4.6 総合考察	17
4.7 本研究の課題	19
謝辞	
引用文献	
資料	
資料1 園長先生への調査依頼書	-1-

資料 2	保育者への調査依頼書 .....	-3-
資料 3	養育者への調査依頼書 .....	-5-
資料 4	調査票 .....	-7-
資料 5	園長先生（園の管理責任者）の同意書 .....	-14-

## 第1章 問題と目的

令和3年度の児童相談所での児童虐待相談対応件数は207,660件と過去最多を記録している(厚生労働省, 2022)。児童虐待は、子どもの精神発達の歪みや身体症状をもたらし、トラウマの後遺症としても把握されている(西澤, 1994)。これらのことから、虐待に対してより細やかな予防・早期発見・早期介入が求められているといえる。

中谷ら(2006)は、育児ストレスが虐待行為を促進する重要な要因になることを示唆している。佐藤ら(1994)は、育児関連ストレスが抑うつ傾向を高めること、大原(2003)は、母親のうつ傾向が虐待に影響を及ぼすことを明らかにしており、虐待を予防するための子育て支援においては、育児ストレスと抑うつの低減が課題といえる。母親の育児ストレスには、母親の子どもへの否定的な感情が影響していることが明らかになっている(高橋, 2007)。また、細坂・茅島(2017)は母親が感情的になると無意識に子どもへ親のパワーを押し付けてしまうこと、自分の感情のコントロールが効かなくなった時に感情優位となり、不条理なしつけが生じることを特徴として見出した。つまり、養育者が情動を制御できないことが不適切なしつけを呼び、それが虐待につながっている可能性があり、育児ストレスや虐待には、養育者の情動の制御が関連していると考えられる。

情動知能とは、自分や他者の感情状態が分かること、感情をコントロールできること、適切に評価できることなどの情動を扱う個人の能力のことをいう(Salovey & Mayer, 1990)。情動知能は、ストレス反応と負の相関があること、抑うつ・不安、無気力、怒り・不機嫌を低減させることが明らかになっている(豊田・照田, 2013)。大橋・桂・星野・臼井(2015)は、3歳6ヶ月までの子どもの母親を対象とし、育児ストレスと情動知能の研究をしているが、同様に虐待リスクの高い4歳から6歳の子どもの養育者についての研究は確認されていない。

そこで本研究では、虐待のリスクが高い0歳から6歳の子どもの養育者を対象に、育児ストレスが抑うつに正の影響を与える過程において、情動知能がどのように影響しているのかを調査した。それにより、児童虐待や子育て支援に役立つ新たな知見が得られると考える。

## 第2章 方法

調査には質問紙法を用いた。質問紙は、対象者に関する項目、情動知能を測定する尺度であるJ-WLEIS(豊田・山本, 2011)、育児ストレスを測定する尺度である育児ストレス尺度(清水, 2001)、抑うつを測定する尺度である自己評価式抑うつ尺度(Zung, 1965)の4つの大項目で構成した。

本研究は、2022年11月に桜美林大学研究倫理委員会の承認を得た上で実施された(承認番号22034)。A県の認定こども園・養育者それぞれに対し、倫理的配慮を行なった上で調査を実施した。こども園の園長(担当者)へ研究の説明をした上で同意いただき、保育者(担当者)から0歳から6歳の子どもをもつ養育者に調査の趣旨と倫理的配慮の説明書、調査票、密封用の封筒を配布いただいた。回答をもって調査への同意を得られたこととし、密封した状態で養育者から保育者(担当者)に提出していただいた。保育者(担当者)が回収したアンケートは、園全体でまとめ、全て調査者へ郵送してもらった。

分析は、育児ストレス尺度(清水, 2001)に対して探索的因子分析、J-WLEIS(豊田・山本, 2011)に対して確認的因子分析を用いて、下位因子の構成を確認した。次に、兄弟の有無別、子どもの年齢別に各尺度に違いはないか、 $t$ 検定を行った。さらに各下位尺度間の相関を検討するために相関分析をした後、共分散構造分析を用いて、育児ストレスと抑うつ、情動知能との関連を検討した。

## 第3章 結果

質問紙は、572名に対し、572部配布され、358名のデータが回収された(回収率62.5%)。有効回答数は、344票(有効回答率96.1%)であった。

育児ストレス尺度（清水，2001）を主因子法，バリマックス回転による探索的因子分析を行なった結果，3項目が除外され，30項目，4因子「育児への負担感」「パートナーの無理解」「子どもの能力への不安」「周囲からの孤立」が検出された，J-WLEIS(豊田・山本，2011)には，確認的因子分析を行い，内的整合性は問題ないとされた。兄弟の有無別による各尺度の差をみた結果，育児ストレス尺度の「育児への負担感」は，「兄弟あり」よりも，「兄弟なし」のほうが有意に高い得点を示していた。その他の兄弟あり・なしの得点差は有意ではなかった。子どもの年齢別による各尺度の差を確認した結果，いずれも有意ではなく，0歳から3歳と4歳から6歳で大きく値が変わらないことが示された。共分散構造分析では， $\chi^2=68.6$ ， $df=24$ ， $GFI=.957$ ， $AGFI=.920$ ， $RMSEA=.075$ ， $AIC=110$ ， $CFI=.941$ と、適合度指標が最も当てはまりのよいモデルが採択された。育児ストレスが抑うつに正の影響を与えており，情動知能が両者に負の影響を与えていることが明らかになった。このモデルの抑うつの説明率は49%と高かった。

#### 第4章 考察

共分散構造分析により，育児ストレスが抑うつを高めており，情動知能が育児ストレスと抑うつの両者に対して負の影響を与えているという新たな知見が示された。今後養育者に対し，情動知能を高めるための介入を行うことが児童虐待防止や子育て支援に役立つことが示唆された。

また，兄弟がいるよりも，いないほうが育児ストレスの「育児への負担感」が高まることが明らかになった。子育て支援においては，初産婦のほうが育児ストレスが高くなることを念頭に置き，支援を行うことの必要性が示された。また，0歳から3歳，4歳から6歳の子どもをもつ養育者別に，育児ストレスと情動知能，抑うつを比較したところ，いずれの値も変わりなく，0歳から6歳にかけて，切れ目のない子育て支援が求められることが示唆された。

引用文献

- 朝長 昌三・福井 昭史・地頭菌 健司・中村 千秋・小原 達朗・柳田 泰典(2010). 攻撃性に関する横断的研究—小学生から大学生まで— 長崎大学教育実践総合センター紀要 9, 5-16.
- Ciarrochi, J., Dean, F. P., & Anderson, S. (2002). Emotional intelligence moderates the relationship between stress and mental health. *Personality and Individual Differences, 32*(2), 197–209.
- Davies, M., Stankov, L., Roberts, R. D. (1998). Emotional intelligence: In search of an elusive construct. *Journal of Personality and Social Psychology, 75*(4), 989–1015.
- Field, T., Healy, B., Goldstein, S., & Guthertz, M. (1990). Behavior state matching and synchrony in mother infant interactions of nondepressed versus depressed dyads. *Developmental Psychology, 26*, 7-14.
- 福田 一彦・小林 重雄(監訳)(1973). 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神経誌 75(10), 673-679.
- Goleman, D. (1995). Emotional intelligence: Why it can matter more than IQ?. New York Bantam Books.
- 細坂 泰子・茅島 江子(2017). 乳幼児を養育する母親のしつけと虐待の境界の様相 日本看護科学会誌 37, 1-9.
- 池田 由子(1987). 児童虐待 ゆがんだ親子関係 中央公論社
- Joseph, D. L. & Newman, D. A. (2010). Emotional intelligence: An integrative meta-analysis and cascading model. *Journal of Applied Psychology, 95*, 54-78.
- 神谷 哲司(1999). 乳児の泣き声に対する親の認知と対処行動 家族心理学研究, 13, 103–114.
- 岸 竜馬(2011). 弁証法的行動療法の有効性と問題点 *Rikkyo Clinical Psychology Research, 5*, 15-26.
- 厚生労働省(2007). 子ども虐待対応の手引きの改正について 子ども虐待対応の手引き 第2章 発生予防 <https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv12/02.html> (2022年8月4日閲覧)
- 厚生労働省(2021). 令和元年度福祉行政報告例の概況 被虐待者の年齢別対応件数の年次推移 <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/gyousei/21/dl/gaikyo.pdf> (2022年9月2日閲覧)
- 厚生労働省(2022). 令和4年度全国児童福祉主管課長・児童相談所会議資料 虐待防止推進室 子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について(第18次報告)(社会保障審議会児童部会児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会)特集「虐待死に至ってしまった事例の関係機関の関与状況」にかかる集計とまとめ <https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/06.pdf> (2023年5月2日閲覧)
- 厚生労働省(2022). 令和3年度における児童相談所での児童虐待相談対応件数および月別件数(令和3年4月～令和4年3月) <https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000987725.pdf> (2023年5月2日閲覧)
- 国立研究開発法人 国立成育医療研究センター(2018). 平成29年度 子ども・子育て支援推進調査研究事業 乳幼児健康診査のための「保険指導マニュアル(仮称)」及び「身体診察マニュアル(仮称)」作成に関する調査研究 [https://www.nchd.go.jp/center/activity/kokoro\\_jigyo/manual.pdf](https://www.nchd.go.jp/center/activity/kokoro_jigyo/manual.pdf) (2022年12月11日閲覧)
- 倉林 しのぶ・太田 晶子・松岡 治子・常盤 洋子・竹内 一夫(2005). 乳幼児健診に来所した母親のメンタルヘルスに及ぼす因子の検討 対象児の年齢との関連 日本女性心身医学会雑誌 10(3), 181-186.
- Law, K. S., Wong, C. S., & Song, L. J. (2004). The Construct and Criterion Validity of Emotional Intelligence and Its Potential Utility for Management Studies. *Journal of Applied Psychology, 89*(3), 483–496.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). Stress, appraisal, and coping. New York:

- Springer.
- Linehan, M. M. (1993). *Cognitive-Behavioral Treatment of Borderline Personality Disorder*. The Guilford Press. (マーシャ・M, リネハン. 大野 裕 (監訳) 岩坂 彰, 井沢 功一朗, 松岡 律, 石井 留美, 阿佐美 雅弘(訳) (2007) 境界性パーソナリティ障害の弁証法的行動療法 誠信書房)
- Mayer, J. D. , & Salovey, P. (1997). What is emotional intelligence? In P. Salovey & D. Sluyter (Eds. ), *Emotional development and emotional intelligence: Educational implications*. New York: Basic Books. 3- 31
- 三国 久美・深山 智代・広瀬 たい子・工藤 禎子・桑原 ゆみ・篠木 絵理・草薙 美穂(2003). 1歳6か月児を持つ両親の育児ストレスとコーピングスタイル 26(4), 31-43.
- 村上 京子・飯野 英親・塚原 正人(2005). 乳幼児を持つ母親の育児ストレスに関する要因の分析 小児保健研究 64(3), 425-431.
- 中谷 奈美子・中谷 素之(2006). 母親の被害的認知が虐待的行為に及ぼす影響 発達心理学研究 17(2), 148-158.
- 西澤 哲(1994). 子どもの虐待：子どもと家族への治療的アプローチ 有斐閣
- 小原 倫子(2005). 母親の抑うつおよび情緒応答性と育児困難感との関連 小児保健研究 64(4), 570-576.
- 大橋 純子・桂 敏樹・星野 明子・臼井 香苗(2015). 乳幼児を養育する母親における育児ストレスと情動知能要因との関連 小児保健研究 74(6), 878-883.
- 大原 美知子(2003). 母親の虐待行動とリスクファクターの検討 -首都圏在住で幼児をもつ母親への児童虐待調査から- 社会福祉学 43(2), 46-57.
- 奥村 ゆかり・松尾 博哉(2011). ベビーマッサージが母子双方のストレス反応に及ぼす効果に関する研究 母性衛生 51, 545-556.
- Oldham, J. M., Phillips., & Gabbard, G. O. (2001). Practice Guideline for the treatment of Patients with Borderline Personality Disorders. *Supplement to the American Journal of Psychiatry*, 158, 1-52.
- Por, J. , Barriball, L. , Fitzpatrick, J. and Roberts, J. (2011). Emotional Intelligence: Its Relationship to Stress, Coping, Well-Being and Professional Performance in Nursing Students. *Nurse Education Today*, 31, 855-860.
- Radke-Yarrow, E. M., Cummings, L.Kuczynski, & M. Chapman(1985). Patterns of attachment in two- and three-year-olds in normal families and families with parental depression. *Child Development*, 56(4), 884-893.
- Salovey, P. , & Mayer, J. D. (1990). Emotional intelligence. *Imagination, Cognition and Personality*, 9, 185-211.
- 佐藤 達哉・菅原 ますみ・戸田 まり・島 悟・北村 俊則(1994). 育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連 64(6), 409-416.
- 島澤 ゆい(2014). 育児ストレスを抱える母親へのサポートに関する検討：先行研究の動向をもとに 金城学院大学大学院人間生活学研究科 14, 29-41.
- 清水 嘉子(2001). 育児環境の認知に焦点をあてた育児ストレス尺度の妥当性に関する研究 ストレス科学 16(3), 176-186.
- 清水 嘉子・西田 公昭(2000). 育児ストレス構造の研究 日本看護研究学会雑誌 23(5), 55-67.
- 菅原 ますみ(1997). 養育者の精神的健康と子どものパーソナリティの発達-母親の抑うつに関して 性格心理学研究 5(1), 38-55.
- 杉山 崇(2002). 臨床心理学研究における抑うつの定義と研究モデルについて 学習院大学人文科学論集 11, 187-204.
- 高橋 有里(2007). 乳児の母親の育児ストレス状況とその関連要因 岩手県立大学看護学部紀要 9, 31-41.
- Toyota, H.(2011). Differences in relationship between emotional intelligence and self-acceptance as function of gender and *ibasho* (a person who eases the mind) of



- Japanese undergraduates. *Psychological Topics*, 20, 449-459.
- 豊田 弘司(2014). 愛着スタイル, 情動知能及び自尊感情の関係 教育実践開発研究センター紀要 23, 1-6.
- 豊田 弘司・森田 泰介・金敷 大之・清水 益治(2005). 日本版 ESCQ (Emotion Skills & Competence Questionnaire) の開発 奈良教育大学紀要 54, 43-47.
- 豊田 弘司・李 王然・山本 晃輔(2011). 日本と中国の子どもにおける学習習慣と情動知能に関する比較研究 奈良教育大学紀要 20, 13-18.
- 豊田 弘司・照田 恵理(2013). 大学生におけるストレス, ストレス反応及び情動知能の関係 奈良教育大学紀要 62(1), 41-48.
- 豊田 弘司・山本 晃輔(2011). 日本版 WLEIS(Wong and Law Emotional Intelligence Scale)の作成 教育実践総合センター研究紀要 20, 7-12.
- 豊田 弘司・吉田 真由美(2012). 子どもにおける居場所, 情動知能及び学校適応 奈良教育大学紀要 21, 9-17.
- 内山 喜久雄(1997). EQ, その潜在能力の伸ばし方 株式会社講談社
- Wong, C. S., & Law, K. S. (2002). The effects of leader and follower emotional intelligence on performance and attitude : An exploratory study. *The leadership Quarterly*, 13, 243-274.
- 山下 洋・吉田 敬子(2004). 自己記入式質問紙を活用した産後うつ病の母子訪問地域支援プログラムの検討—周産期精神医学の乳幼児虐待発生予防への寄与— 日本子ども虐待防止学会学術雑誌 6(2), 218-231.
- Zung, W.W.K.(1965). A Self-Rating Depression Scale. *Arch Gen Psychiatry*, 12, 63-70.